

オブジェクション168

岡森 利幸

騒がせる人たち編

本編は、次の10項目からなる。

- ① ベイルート港の倉庫で大爆発
- ② ベラルーシの独裁者ルカシエンコ
- ③ イギリス王室の異端・ヘンリー王子とメーガン妃
- ④ 武漢研究所と新型コロナウイルスの関係
- ⑤ 黒人女性として差別に抗議する大坂なおみ
- ⑥ トランプ氏の集会に來なかつた若者たち
- ⑦ 2児を車に置いて夜遊びしていた母親
- ⑧ PCR検査で韓国の申し出を黙殺した日本政府
- ⑨ 父殺しの少年たち
- ⑩ ALS 囑託殺人に問われた医師たち

・文中敬称略。

・文中の会話文には、筆者が推測するフィクションが含まれる。

・以下の【】内は、新聞記事・週刊誌の引用・要約を示す。

① ベイルート港の倉庫で大爆発

【毎日新聞夕刊 2020/8/5 一面

ベイルートで爆発、8月4日午後6時ごろ、赤茶色い巨大な煙が立ち上った。】

【読売新聞朝刊 2020/8/6 一面

レバノン・ベイルートで、港の倉庫に貯蔵されていた硝酸アンモニウムが大規模爆発、死者100人超。2014年から2750トンが置かれていた。】

【毎日新聞朝刊 2020/8/7 国際

レバノン爆発、死者137人、爆薬原料を放置していたことが原因か。ロシア人実業家が所有する貨物船が押収され、倉庫に保管されていた。13年秋に船は故障のため停泊したが、入港料が支払われなかつたため、積荷が差し押さえられた。】

この動画がすごい。たまたま一人の市民が撮影したものだろうが、巨大なきのこ雲が立ち上がり、毒々し

い色の大量の煙が巻き込むように襲いくる……。まるで原爆の投下を思わせるし、火山の爆発で火砕流が発生したかのような大迫力だ。この爆発によって、ベイルート港の周辺地域の街が壊滅状態になった。多大な人的・物的な被害に加え、港湾機能が麻痺してしまっただから、ベイルート全体の都市機能に大きなダメージを与えた。

長年、当局が爆発の恐れのある危険物を港の倉庫に放置していたものだから、これはもう人災だろう。倉庫の火事によって爆発を引き起こしたという。火事に対する備え（たとえば、スプリンクラー）ができていなかったことになる。

爆発したのは、引き取り手のない硝酸アンモニウム2750トン。つまり大量の産業廃棄物同然の物質を、港の倉庫に6年間置いていたものだ。倉庫に大量の物品を保管するだけで、それなりのコストがかかるものだろう。しかし、市の当局は何もなかったから、ずさんだといわれても仕方がない。硝酸アンモニウムは、爆薬の原料にもなり（主に化学肥料の原料）、爆発する危険が知られていた。これまでも何度が、世界の各地で爆発事故を起こしていたものだから、当局の認識が甘すぎる。その間に、危険性を指摘する声が上が

っていたともいわれている。

当局には当該国の政府に撤去を要請する方策があったと思うし、差し押さえたのだから、売り払って入港料の代わりとする権利や義務があったはずだ。港湾管理の役人たちには危機管理や交渉能力に問題があったことになる。一言で言えば、怠慢だった。

怠慢なのは一部であり役人全体ではないにしろ、今では逃亡者になっているカルロス・ゴーンにとつて、そんないいかげんな、ゆるい役人たちがいる街だから、居心地がよいのだろう、と私は皮肉ってみたくなる。なお、コーンの邸宅の、爆発による被害は軽微だったという。悪運の強い人だ。

7年前、硝酸アンモニウム2750トンを積んだ貨物船は、ロシア人実業家が所有していたもので、黒海からナイジェリアに向かっていたというが、足取りがおかしい。地中海に出て途中ギリシャに寄ってから、レバノン・ベイルートに入った。ベイルートは、ナイジェリアとは逆方向だろう。修理のためと説明された。入港したけれど、入港料が払えなかったとは、情けない。銀行などに資金を借りることもできなかったことになる。そんな船では資金を貸す価値もなかったということだろう。船主は硝酸アンモニウムの売込みに失

敗し、受け取り手がなく、金もなくなったから、差し押さえられた。硝酸アンモニウムが倉庫に保管された後、船は沈没した。修理もされず、放置されていたためだろう。そうとう老朽化していたようだ。

ロシア人実業家は船もろとも硝酸アンモニウムを手放して、清々したのでろうか。「あんなボロ船、沈んでも惜しくはないよ。積荷は危険物だし商品価値も低いから、もう要らないよ。あとは野となれ、山となれだ」という彼の声が、私の耳には聞こえる。それでベイルートが廃墟になるとは、彼は想像もしていなかったことだろう。

② ベラルーシの独裁者ルカシエンコ

【毎日新聞朝刊 2020/8/11 総合、国際】
ベラルーシ、大統領選でルカシエンコ氏（66）が6選を果たした。5年任期。しかし各地で抗議のデモが起きた。3000人拘束。選管発表によると、（ルカシエンコ氏の）投票率は84.2%だった。対立したチハノフスカヤ氏（38）の得票率が80%を超えたとする独立団体の調査もある。投票日の8月9日にはベラルーシ国内のインターネットに通信障害が発生し、独

立系の選挙監視グループが計画したオンラインによる独自集計を妨害するために意図的に障害を起こした可能性が取りざたされている。】

【毎日新聞朝刊 2020/8/12 国際】
ベラルーシ大統領選に不正の疑いがある。ドイツ外務省報道官「多くの不正の兆候がある」

SNS上では、投票所から投票用紙が入ったと見られる袋を抱えて外に出る女性を写す動画が拡散するなど、大規模な選挙不正があったとの見方が広がっている。過去の大統領選で野党候補や野党支持者を大量逮捕したルカシエンコ氏の政治手法が懸念されていた。】

【毎日新聞夕刊 2020/8/12 総合】

ベラルーシ、3日連続の（大統領選の結果に対して）抗議デモが起きた。治安部隊は市民を取り囲んで暴行し、次々と拘束した。】

【毎日新聞朝刊 2020/8/14 国際】

ベラルーシ、選管がルカシエンコ氏の圧勝を発表したが、選挙のやり直しを求めるデモで、拘束者累計6700人になった。アレクサンドル・ルカシエンコ大統領率いる政権はデモ鎮圧強化している。（治安当局側の暴力行為により）累計で少なくとも250人が病院に搬送された。】

【読売新聞朝刊 2020/8/15 国際

ベラルーシ、デモ参加2000人を釈放。これまで累計6700人以上が拘束されている。拘束者を収容しきれなくなったとの見方がある。釈放された人々は「12人用の監房に32人が押しこめられた」

抗議の動きは大統領の支持層とされる国営や公営企業従業員にまで広がっている。中央選挙管理委員会が14日発表した大統領選の確定結果によると、ルカシェンコ氏が80.1%、チハノフスカヤ氏10.1%だった。】

【毎日新聞朝刊 2020/8/20 総合

ゆれるベラルーシ、大統領選で多くの国民が不正を疑い、退陣を求める声が止まらない。

8月17日、ミンスクの国営工場を視察に訪れた大統領は労働者たちにそっぽを向かれた。そして退陣を求める声が上がって、罵声を浴びる事態になった。

2004年に欧州連合（EU）が人権弾圧を理由にベラルーシに制裁を発動した。06年に米国がそれに続いた。】

【読売新聞朝刊 2020/8/28 総合

混迷ベラルーシ、ある開票所で、地区の幹部職員が「2人（ルカシェンコとチハノフスカヤ）の票数を入

れ替えよ」と指示する音声ファイルが（ウェブ上に）流出した。】

【毎日新聞朝刊 2020/8/29 特集

ベラルーシの主都ミンスクを埋めた20万人のデモを見て、ルカシェンコは防弾チョッキを着てヘリコプターに乗り、ライフル銃のカラシニコフを握り締め、デモで歩く民衆を「ネズミども！」と叫んだ。】

【読売新聞朝刊 2020/8/30 総合

プーチン氏が明言「ベラルーシ大統領選は正当」】
【毎日新聞夕刊 2020/9/15 総合

ロシアがベラルーシを支援。首脳会議で追加融資15億ドルを合意した。チハノフスカヤ氏は、ロシア国民に声明を出した。「あなたたちの税金が我々を殴打するために支払われることになる」】

【読売新聞朝刊 2020/9/17 ニュースの門

ルカシェンコ、欧州最後の独裁者、最大の危機。

94年7月、大統領初当選。96年11月、大統領任期を2001年まで延長した。99〜2000年、野党有力者ら相次いで行方不明にたったことに政権関与の疑惑がある。2001年9月、大統領に再選。

周辺をイエスマンで固める。意に沿わなければ敵とみなし、投獄や国外追放で排除する。大統領選でも2回

めの2001年以降は大規模な不正を重ねてきたといわれる。大衆迎合主義の面もある。国営企業中心の経済にこだわり、医療や教育の無料化を維持する。年金額の引き上げは大統領選前に行う恒例の政策だ。】

【毎日新聞朝刊 2020/10/4 国際

米は10月2日、ベラルーシ制裁を決めた。個人に対する制裁で、米国内の資産剥奪、米国人との取引が停止される。制裁対象は、治安当局の幹部や大統領選を担当した中央選挙管理委員会の幹部ら。】

・治安部隊はデモ参加者を叩きまくる

ベラルーシでは、毎日曜日、何万人もの人々が街に繰り出し、大統領選のやり直しなどを求め、デモをすることになっている。みな、暴徒化する恐れはない人たちだ。でも、そこには治安部隊が待ち構えており、彼らは手に手に、長さ1メートルほどの棒を持つ。デモ行進を阻止するため、てぐすね引いている。

重装備の警察官が、デモの参加者を棒でたたきしめるの映像が流れた。厳しく情報統制されながらも、静止画や動画に撮られた。その棒はむちのようにしなる。デモ参加者の男が地面に横ばいになり、立ち上がろうとすると、隊員がその背中をバシバシたたく。ひたす

ら叩きまくる。ときには蹴りを入れる。後日、叩かれた跡が生々しく残る映像も公開された。五六カ所がミズばれのようになっていた。これは痛々しい。

ベラルーシでは、デモ隊を排除するために治安部隊が棒で叩きまくることが常套手段になっているようだ。そのためによく訓練されていることが伺える。制服の下には、さぞや鍛え上げられた腕をしているのだろう。棒は、政権に反抗する人々を痛めつけるにはちょうどいい道具になっている。デモに対して、実弾を射撃したり装甲車を繰り出したりする一党支配の強権的な国の例と比べると、いくらかましかもしれない。

・独裁者ルカシエンコ

ベラルーシといえば、独裁国家というレッテルが貼られている。国際社会からにらまれていて困る。ルカシエンコ大統領が権力をふるい、好き勝手に国家を統制している。自分に逆らうようなやつらには、容赦はしない。

ルカシエンコ政権は、アメとむちを使い分ける。一部のの人たち（主に農村部）の支持を取り付けたいものだから、カネをばら撒くような政策をする。この国だけではないけれど、財政赤字が膨らむのも、それが一つの要因だろう。今般の大統領選を正当とした唯一の

他国首脳・ロシアのプーチン、彼との会談でルカシエンコはロシアからの経済支援の約束を取り付けたのはありがたいことだろう。独裁者同士は、友だちになりやすいようだ。

ルカシエンコは汚職追放を掲げ、ポピュリズム（大衆迎合主義）で好感を得て、民衆の味方のような顔をして大統領になって（1994年7月に大統領初当選）からは、権力を強引にふるうようになった。自分が汚職をしているようなものだろう。

憲法を変えて、大統領の権限を強化してきたし、任期も延長してきた。再選も可能にした。一番得意とすることは、選挙に勝つことだ。自分が立候補する選挙では連戦連勝を続けてきた。憲法改正の国民投票でも、ルカシエンコの意向が反映した内容で採択されている。

・選挙で当選する方法

その主な手法は、野党の主導者などライバルを立候補させないことだ。かれらが立候補する資格を無効にする、拘束する、行方不明にする。ルカシエンコが大統領になってから、相次いで野党指導者を失踪させてきた。

今回の大統領選でも、ルカシエンコ政権は、有力な

ライバルたちを次々につぶしてきたが、チハノフスカヤに関してはノーマークだった。一人のライバルの妻だったが、若い無名の新人であり、おそらく「女に票を集められるはずがない」と軽視し、立候補を認めたところが、反ルカシエンコの民意は、ルカシエンコの想像をはるかに超えたものだった。チハノフスカは大多数の人々の後押しによってダントツの一番人気となったわけだ。

独立団体の調査結果が最も信頼できる数値だろう。そこでは、チハノフスカヤ氏の得票率が80%を超えたとする。

しかし政権が、投票結果の数値を改ざんすることは「公然の秘密」だ。

ルカシエンコはその権力を用いて選挙委員会を掌握しているのだろう。選挙管理委員たち、特に幹部たちは、ルカシエンコの息のかかった者で固められているのは確かだ。ルカシエンコを当選させることが彼らの任務になっていくわけだ。彼らは僅差ならともかく、大差の結果をひっくり返すのだから、大胆なものだ。

その手口がいくつか目撃され、あるいは不正を指示する幹部の声が外部に聞こえたりして、国際社会にもれ出ている。前掲の記事の中に示されているとおりだ。

選挙結果を改ざんして、ルカシエンコの当選をでっちあげている。選挙結果がこうもねじまげられるのは、あきれる限りだ。

選挙結果は数値を示すことで決まる。ただし得票数ではなく、得票率が示されるのがベラルーシ流だ。得票紙の枚数をそのまま発表すればいいのだが、わざわざ得票率を計算している。得票率のほうは、ごまかしやすいという理由からだろう。

これまでの何回かの大統領選で、初回を除き、すべてのケースで不正が疑われている。疑わしいというより、断定されているといつてよい。つまり彼が権力を持ったとたん、選挙に圧力を加えている。ベラルーシは独立後、とんでもない人物を初代大統領にしてしまったことになる。人々は棒で殴られた痛みで、それが実感されよう。

国民の大多数から強く抗議され、そっぽを向かれ、どんなに嫌われようと、国際社会から厳しい制裁を受けようと、ルカシエンコは権力の座から降りようとはしない。大規模なデモにも屈せず、むしろ攻勢に転じている。自ら辞任するようにはみえない。60代の年齢だから、ルカシエンコの天下はまだまだ続きそうだ。そうまでして権力の座にしがみつきたいルカシエンコ

とは——その熱意だけ買いたい。

③ イギリス王室の異端・ヘンリー王子とメーガン妃

【毎日新聞朝刊 2020/1/10 国際
エリザベス女王（93）の孫ヘンリー王子（35）は1月8日に、王室の中核メンバーが担う公務から退いた上で、財政的な独立を目指し、王室と距離を置きたいとの考えを表明した。

王子夫妻は2018年5月に結婚し、2019年5月には長男アーチャーちゃんが生まれた。】

【毎日新聞朝刊 2020/1/10 国際

10日付の英紙タイムズによると、王子夫妻（ヘンリー王子とメーガン妃（38））の側近は、女王らの賛同を得てから公務を巡る見解を発表すべきだと助言していたが、夫妻が発表を強行した。】

【毎日新聞夕刊 2020/1/14 社会

英王室は13日、緊急の会合を開催した後、女王は声明を発表した。夫妻の要望を「尊重し理解する」姿勢を示し、一定の「移行期間」にカナダと英国とを往来するのを認める意向を明らかにした。英メディアによると、会合には、女王のほか、チャールズ皇太子、ヘ

ンリー王子、ウィリアム王子らが参加した。（メーガン妃は参加を拒否した）】

【毎日新聞朝刊 2020/1/20 社会

ヘンリー王子の今春引退について、エリザベス女王が声明「ハリー、メーガン、アーチャーは常に愛するわが家族の一員だ」「今日の合意により彼らが幸せで平穏な生活をスタートできることが家族全体の希望だ」と述べた。

王子夫妻はこれまで夫妻の動向を詳細に伝える英メディアの報道に不満を抱いてきたとされる。】

【毎日新聞朝刊 2020/1/21 余録

ヘンリー王子と妻メーガン夫妻は希望していた一部公務もできなくなる。もともと、メディアの過剰取材に不満で、主要王族からの離脱や経済的自立の意向を公にしていた。】

【毎日新聞夕刊 2020/3/10 総合

3月9日の「英連邦の日」にヘンリー王子と妻メーガン妃が儀式に参加した。公務としては今回が最後になる。】

【プレジデント 2020/3/4

キャサリン妃（優等生）とメーガン妃（反逆児）どっちが美しい人生か。】

【文春新書『ヘンリー王子とメーガン妃』亀甲博行、2020/3/20 発行

王室一の問題児が選んだ「年上、バツイチ、黒人系」。メーガン妃の「セレブ気取り」で支持率急落。エリザベス女王は王室を守るため2人を切り捨てた。

ある幼馴染の友人は、最初の夫との離婚をメーガンから告げられたとき、その理由を聞いたが教えてもらえなかったという。「一緒に親友として育った、私の知っているメーガンではなくなっていた。彼女にはもう新しい友人ができて、違う世界に行ってしまった」「メーガンは人との付き合いをとて計算して、戦略的だった。ある人が自分の人生に必要なと思ったら、簡単に切り捨てる。交渉の余地すらない」【女性自身 2020年6月2日号メーガン妃、キャサリン妃との宮殿怒声バトル

ロンドン・ケンジントン宮殿はウィリアム王子（37）とキャサリン妃（38）が3人の子どもと暮らしている場所であり、ヘンリー王子とメーガン妃も17年秋の婚約以来、その敷地内に住んでいたが、19年春にウィンザーにあるフロッグモア・コテージに引っ越した。ケンジントン宮殿でメーガン妃が宮殿スタッフに怒声を張り上げるなどの傲慢ぶりを、キャサリン妃が見聞

きしていた。メーガンが宮殿スタッフから付けられていたニックネーム（隠語）の中に、DI2、DIーLite（ダイアナ2世、ダイアナ簡易版。ダイアナ元妃のように気難しいという意味）があった。メーガン妃はフロググモア・コテージでの生活にも不満を漏らしていたという。「こんな名の知れない田舎で引退したくない」】

【読売新聞夕刊 2020/8/4 国際

ヘンリー夫妻の公務引退までの証言を集めた本『Fighting Freedom』が刊行される。ウィリアム王子がヘンリーに上から目線の忠告し、結婚に反対したこと、19年12月のエリザベス女王のクリスマス演説に際して、机に置く重要メンバーの写真の中にヘンリー夫妻の写真がなかったことが挙げられている。】

ヘンリー王子は通称「ハリー」と呼ばれることがあるし、メーガン妃は翻訳で「メガン」とも記されることがあることを前置きしたい。（メガンと称する場合、メにアクセントを置いて発音したい）

・ヘンリー

ヘンリーは、チャールズ皇太子と故・ダイアナ元妃

との間に生まれた二男だ。幼いとき、母親と引き離され、その死に接した影響が残る、といわれている。

ヘンリー自身、その結婚については世界的に注目されてきたが、王族（ロイヤルファミリー）としては自由気ままな生活をしてきたし、プレイボーイとして数々の浮名を流してきた。週刊誌に取り上げられるネタをばら撒いてきた。彼の母、故ダイアナ元妃がパパラッチ（フリーランスの写真家、有名人をねらう）に追いかけて回されたあげく、交通事故死した事例があったから、取材は抑制されていたものの、その行動は何度かゴシップ的な記事にされた。品行方正とは言えない人だ。いくつかの点で軽率のそしりもあった。

ヘンリーの王位継承順位が6位に置かれていることが、彼自身を一番くさらせる要因だろう。王室の一人として重要視されていないわけだ。この不満が大きかった、と私はみる。兄は2位だから、このランクの差は大きい。ロイヤルファミリーとして列に並ぶとき、前列に出されることはなく、常に後ろだから、屈辱的でもある。「ボクなんて、王室の末席に座らされているわけね」と考えてしまうことだろう。

・メーガン・マークル

メーガンは、両親が離婚し、母子家庭で育てられた。

母は黒人系だった。母の苦勞や努力を見ながら成長した。結婚式のとき、父を招待しなかった。確執が消えていなかったとみえる。メーガンは、外見は白人系に見えるものの、アフリカ系の混血であることが影を落としてゐる。

アメリカの名門ノースウエスタン大学で演劇と国際関係学を学んでから、舞台上に立ちながら、女優を目指した。役に恵まれなかったから、下積みが長かった。やがて2011年に映画プロデューサー、トレヴァー・エンゲルソンと結婚した。この年に女優としてテレビ出演をはじめた。30歳になっていた。

そのテレビ番組ではセクシーさを振りまく役割の助演女優だったから、どうしても世間の目はさげすむところがある。そこそこの人気を得てからは、そんなお色気キャラを演じることを拒否するようになった。番組のディレクターあたりが「脱げ!」と言つても脱がないのだから、そうとうシンが強かったのだろう。さげすまれたくないという思いの強い人なのだ。

結婚して2年もたたないうちに、その映画プロデューサーと離婚した。彼女の一方的な「心変わり」と思えるような状況だった。離婚理由について「和解したい不和」を挙げた。夫婦間に憎しみやいさかいが生

じたわけではなく、原因ははっきりしない。

そんな態度の急変は、女優としての名声を得てからだ。長年の友人についても、仲たがいの間でもなく、メーガンのほうから去っていったというケースが報じられている。そんなエピソードは、彼女の持つ上昇志向のためと思えてくる。

彼女の美貌と才知（学識）、女優として得られた名声がエンジンとなつてして上昇志向の彼女を押し上げたことになる。

つまり、彼女は上のクラスの男を夫として選び、友人についても上のクラスと付き合うようにしていたことが伺える。下々の者との付き合いをやめ、セレブ（有名人や富裕層）の人と付き合い始めている。現状の夫では、セレブたちの夫と比較すれば、どうしても見劣りがする、と考えたのだろう。彼女は上級クラスの男を夫としたいがために、最初の夫から去つたと思われる。夫が平凡すぎて、物足りなかつたと、推測されるのだ。

メーガンは、自由で自己主張の強いアメリカの文化と気風を持つ人だ。

彼女は、「自分を高めるため、行動すること」を第一とする。自分本位の生き方は、彼女の人生哲学だろ

う。

自分はセレブでありたい、と思うにようになり、それを実現している。付き合うのは上流階級の人たちを選ぶようになった。セレブとつきあいをすることによって、ヘンリー王子と知り合えたわけだろう。ハイクラスの男として、ヘンリーなら、この上ないだろう。彼女はヘンリーを選んだ。

ヘンリーにしても、自己主張の強いメーガンに母の面影を見たのかもしれない。

・ 兄ウィリアムの反対

ヘンリーは兄・ウィリアムに、メーガンとの結婚話を出したところ、兄が結婚に反対したのだから、兄弟仲も悪くなったとされている。兄は「あんな女と結婚するのはやめとけ」とでも言ったのだろう。

兄が反対した理由は、いくつかあるだろう。彼女は、気が強く、黒人系の混血であること、3歳年上、離婚歴があること、アメリカ人であること、家柄が違いすぎること……。

ただし、兄が選んだキャサリン妃は、一歳年上で、一般家庭の出の人だ。

イギリス社会では、王族の結婚相手として黒人系の混血は歓迎されない現実がある。特に保守的な人たち

はアフリカ系の人を感情的に快く受け入れられない。表面的に差別しないにしても、彼らを見下すところがある。人々から尊敬を集めることで成り立っている王室としては、不都合なことだろう。

メーガンには離婚歴があることが、引かかるところだろう。宗教的な戒律が意識されるだろうし、一度離婚した者はまた離婚するかもしれない。イギリス王室はいくつかの不倫や離婚騒動でスキャンダルになり、評判を落としてきたところがあるから、また離婚することになってはならないだろう。

メーガンは人気女優だったけれど、正統派の女優の道を歩んだわけではない。お色気派としてブレイクした。気品ある正統派ならともかく、一肌脱ぐことで人気を得るようになった人だ。兄ウィリアムとしては、弟がその色気にまどわされた、という思いを持ったことだろう。

兄としては総合的に考え、イギリス王室にふさわしくないと判断したわけだろう。

・ ヘンリーとメーガンの暮らし

反対する意見があっても、ヘンリーはメーガンとの結婚にこぎつけた。兄以外、結婚反対を口にする王族はいなかったようだ。王室内の空気としては、「ハリ

ー（ヘンリー）は誰とでも結婚していいよ」ということだろう。王室は普段からヘンリーを自由に放任していたのだから。

ヘンリーはアメリカの人気女優と結婚できて満足しているところがある。この夫妻は、婦唱夫随のカップルだろう。お坊ちゃんタイプのヘンリーは、年上のしつかりしたお姉さんメーガンに頭があがらないとみえる。

その後、彼らの型破りな結婚式、出産時の異例なお披露目の仕方（メーガンは姿をみせなかったし、出産した病院をなかなか明かさなかった）、華麗に改造された新居で、ブランド品を買い集めての、贅沢すぎる暮らしぶり、豪華なパーティーを開いたりプライベートジェットで大西洋を往復したり、公務にジーンズ姿で出たりセクシーすぎるドレスを着たり、などの勝手な言動は、しばしばイギリス国民に違和感を与えたり、批判を招いた。イギリス王室といえども、経済的に余裕があるわけではないから、贅沢しすぎてはいけない。イギリス国民およびイギリス連邦の人々から、やっかまれてはいけない。

彼ら自身、だんだん居心地の悪さを感じてきたようだ。メーガンの王室での生活では、その「私の強さ」

をよく出している。自己流を押し通すところがある。古い伝統と格式高いイギリスの王室の型に自分をはめることができなかつたことになる。

メーガンはイギリス王室の「よそよそしさ」を感じ、なじめなかつたようだ。自分を王室に適応させることができなかつたし、宮殿スタッフを怒鳴りまくつたところから、逆に王室を自分にあわせようとしたところがある。宮殿スタッフに対して気難しい面を見せたのは、メーガン自身に何らかのいらだち、あるいはセレブ意識があつたからだろう。ダイアナ元妃も同様だったとは、興味深い。夫が頼りないことが遠因だったりして……。

王室のメンバーとの確執があつたとされる。とくに、ヘンリーの兄ウィリアムの后、いわゆる正統派イギリス人女性・キャサリンとは犬猿の仲状態だつたと伝えられる。ただし、これには報道の表現が大げさなところがある。キャサリン妃は好感度の高い人で、国民に非常に評判のよい人だから、メーガン妃はつねに比較されてしまう。不人気ぶりが目立ってしまう。夫の祖母・エリザベス女王とも、二人だけになる機会が作られながらも、打ち解けなかつたとされる。

クリスマス礼拝は、ロイヤルファミリーが女王の私

邸に集まり、いっしょにすごすことが慣習となつてい
るイギリス王室の伝統的な行事だった。2018年に
は仲の悪い人たちもいっしょに顔を揃えたが、201
9年のクリスマスで、なんと、ヘンリー・メーガン夫
妻はすっぱかした。彼らはカナダにおいて、プライベ
トな時間を持つことを優先したわけだ。

この夫妻は「イギリス王室と距離をおき、自由な生
活がしたい」と考えるようになっていた。

・夫妻の王室離脱宣言

「主要な王族の地位から退き、経済的に独立する」

ヘンリーが1月8日に公務から退く声明を出した。

結婚してから2年もたたないうちの、王室からの離脱
を表明だった。これはヘンリー王子がメーガンに言わ
された感がある。彼らが王室離脱をかつてに発信（女
王や皇太子にも相談もしなかったとされる）したから、
イギリス王室は困惑したことだろう。ここでも女王の
メンツがつぶされたことになる。

エリザベス女王は、1月13日の主要王族による緊
急会合の後、ヘンリーとメーガンを切り捨てるような
決断をしている。この会合では、メーガンの言い分を
聞きたかったはずだが、メーガンは（矢面に立たされ
る）とでも思ったのか、カナダからイギリスに来よう

としなかった。

「あなたたちは、もうかつてにしないさい！」といわん
ばかりの声明を発している。家長格の祖母が、孫を一
族から勘当かんとうしたようなものだろう。

彼らの自由な生活は、本年4月に実現したわけだ。
この行動をアメリカでは理解を示す向きもあるのだが
……。

それは、イギリス国民にとって「受け止められるこ
と」だったようだ。お騒がせの夫婦がイギリスから出
て行くことに、しらけているのかもしれない。

彼らは王族としての権利や義務を放棄したことにな
る。下々の者からすれば、もったいなく思えるところ
だろう。「ウインザー城の中にあつて、大金をかけて
リフォームしたばかりの大邸宅（フロッグモア・コテ
ージ）に住んでいるのに、何が不満か？」と怒る向き
もあるだろう。

メーガン妃が強い希望で押し切り、年下の夫・ヘン
リーがそれに追従した形になっている。制約の多い王
室から離れ、アメリカを拠点として活動をはじめ。
その第一歩がイギリス王室の内幕を暴露する本を出す
ことかもしれない。

夫妻は3月末、イギリスからかなり遠い（プライベ

ートジェットを使うなら、そう遠くないかもしれない) ロサンゼルスに移住した。ヘンリーが、イギリス文化とは異なるアメリカ中心の、メーガン好みのセレブたちとの付き合いで、せわしない生活になじめるかどうか、という心配の声もあがっている。王子の顔色がさえないとも報じられている。

今ごろヘンリーは、兄の助言が正しかったと思っ
ているだろうか。しかし、自分で決めた選択だから、安
易に変えてはいけないだろう。「和解がたい不和」
になるまでは……。

経済的な独立を果たしたが、生活力があるとは思え
ないヘンリーだから、セレブ生活を続けければ、家計が
怪しくなりそうだ。経済的にいよいよピンチになれば、
頭を下げて王室に戻り、公務に復帰する道も残されて
いることだろう。受け入れてくれそうな、唯一の理解
者がチャールズ皇太子(70)であるというのは心強い。
そのうち、ロンドン橋が落ちる、Xデーがやってくれば、
チャールズ王になるだろうから。

10月になって、フィリップ殿下(エリート軍人と
してのキアリアをなげうって、長年、女王の夫として
公私にわたり、傍らで女王を支えてきた)が、王室の
見解を代表するように、メーガンを批判する発言をし

た。「メーガンにはがっかりだ。(公務に関して)夫
のヘンリーを支えようとせず、自分本位の言動ばかり
している」

④ 武漢研究所と新型コロナウイルスの関係

【毎日新聞朝刊 2020/1/27 クローズアップ

中国、地元当局が2019年末の感染発生初期、医師
らに「職場の許可がなければ感染の状況を話してはな
らない」とかん口令を敷いていたと伝えられる。】

【朝日新聞朝刊 2020/3/30 国際

中国・武漢で1月23日から封鎖していたが、4月8日
の封鎖解除に向け、都市機能の回復が進んでいる。市
内8カ所の葬儀場で遺骨の引き渡しが始まった。】

【読売新聞朝刊 2020/5/5 総合

米国務長官が言明、新型コロナウイルスで「武漢から拡散の証
拠ある」】

【毎日新聞朝刊 2020/5/14 国際

中国、豪の牛肉を輸入禁止にした。コロナ調査を巡り
圧力か。】

【読売新聞朝刊 2020/5/18 国際

武漢住民が、コロナ情報隠しで省・市の提訴を準備し

ている。警察は提訴を取り下げよう圧力をかけている。】

【読売新聞朝刊 2020/5/20 国際

中国、豪の大麦に高関税をかけた、約80%。豪は、コロナウイルスの感染源などについて中国が隠蔽したとの疑惑で、独立機関による調査を主張している。】

【毎日新聞朝刊 2020/5/21 クローズアップ

中国は決議の文書調整に参加し、WHO主導の科学的調査、時期は感染収束後、目的は責任追及でなく、再発リスクの低減と明記の条件を主張し、共同提案国に収まった。】

【毎日新聞夕刊 2020/5/25 総合

武漢研究所の所長がウイルス流出説を否定。石正麗氏が所属する研究所が始めて新型コロナウイルスを扱ったのは昨年12月30日だと証言した。石氏によると、SARSのウイルスを調べるためにコウモリからコロナウイルスを採取してきたが、今回の類似性は高くないという。】

【読売新聞朝刊 2020/5/27 国際

中国、ウイルス流出の真相を握る女性・石正麗氏が中国テレビに出て「検体調査まで存在を知らなかった」と証言した。米国が主張する武漢研究所説を否定した。

SARSのとき、彼女は自ら洞窟に行き、野生のコウモリを捕獲し、ウイルスがコウモリに由来することを突き止めた。】

【毎日新聞朝刊 2020/7/8 国際面

7月5日付の英紙サンデータイムズによると、中国湖北省武漢市の中国科学院武漢ウイルス研究所が、2013年に新型コロナウイルスに非常に似たウイルスを確認していた。2012年に中国雲南省の銅山の廃坑でコウモリのふんを片付ける作業をした6人が重い肺炎になり、うち3人が死亡した。石正麗氏らのチームがコウモリのふんを採取し、コロナウイルスを検出した。2016年に科学論文の形で発表したのが、3人の死者には触れていなかった。】

【毎日新聞朝刊 2020/8/1 土記・青野由利

バットウーマン（石正麗さん）再び。石さんが米サイエンス誌の記者の質問に答えた。流出疑惑の元になった雲南省で2013年に採取されたウイルスRATG。新型コロナウイルスと96%一致する遺伝子を持つ。】

なぜ武漢で新型コロナウイルスが流行し始めたのか。

それは多くの人の疑問だろう。武漢市の中で野生動物が食品として取引される市場が最初の発生場所とされていて、どこから持ち込んだものがキーポイントになる。けれど、国際的には中国科学院武漢ウイルス研究所が疑われている。

中国政府は、国際社会に対し、詳細な調査をすることを拒んでいた。国連の場で国際的な調査を要求するオーストラリアに場違いの嫌がらせをしたことは、中国政府の逆鱗に触れたかのような反応だろう。中国とオーストラリアは、それまでもいくつかの問題で対立があったのだが、コロナウイルスの調査要求で一気に火を吹いた。ただし結局、中国は自分の都合のよい条件で調査の受け入れを認めた。調査は中国の主導によって感染収束後に行うなどとしているから、結果報告がうやむやにされる可能性が高い。

中国政府は、武漢ウイルス研究所の主任研究員や所長を公の場に出し、わざわざ全面否定する弁を述べさせたりしている。(発生源は武漢の研究所だ)とする国際的な指摘を否定するに躍起となっていることで、ますます怪しいのだ。否定するばかりで、推論さえ示さない。

感染源がどこであろうと私はこだわらないつもりだ

が、情報を隠蔽するのはよくない。対応が後手に回ってしまふ。武漢においてその初期段階で、感染拡大を警告する医師たちの発言を当局がデマだとして抑え込んだりしたものだから、感染爆発につながったわけだろう。責任を追及されたくないがために、臭いものに蓋をしてしまおうとする中国政府指導者たちの隠蔽体質がここでも垣間見える。

感染が収束したとされ、都市封鎖が解除された武漢市では、その中でもう一つ、感染源として疑われている生鮮市場は、その後も、立ち入り禁止になっているという。ひよつとして、生鮮市場は研究所に距離的に近いのではないかと私は疑ってしまう。ネズミなどが移動できる距離にあったりしていないだろうか。

この研究所では、2012年のころから、あるいはもっと以前からコロナウイルスを研究していた。今回の新型コロナウイルスに似たタイプのもも扱っていた。2012年に中国雲南省の銅山の廃坑でコウモリのふんを片付ける作業をした6人が重い肺炎になり、うち3人が死亡した。この事実だけでも、このウイルスはヒトにはかなり危険なものだったと推測できる。それを石正麗氏らのチームは、雲南省から約1500キロ離れた武漢の研究所に持ってきて、研究していたわけだ

ろう。ウイルスが漏れ出た可能性が疑われる。感染した研究者の一人が無症状のまま研究所の外に出たと推測することもできそうだ。

そもそも、その毒性について早めに公知させていなかったことが、研究者の姿勢として、まずい。死亡率の高いウイルスであることをすぐに論文に書き世界に知らしめるべきことだろう。

「コウモリのふんから採取したウイルスは、今般のコロナウイルスと異なる」と彼女がいくら言い張っても、コウモリのふん由来のウイルス、つまり同じ系列のウイルスであることは否定できないだろう。ウイルスはつねに変異するから、「異なる」といつても、どの程度異なるかが問題だ。「土記」の青野由利さんによると「新型コロナウイルスと96%一致する遺伝子を持つ」というから、共通性の高い近縁種に違いない。

大都市にある研究所が、危険なウイルスをもらし、拡散するきっかけとなったとすると、市民が怒り出し、行政当局が槍玉に挙げられる恐れがある。役人たちの責任問題に発展する恐れがあるから、隠しておきたいのだろう。今回は武漢の市民だけではなく、世界的な規模の怒りになってしまいそうだ。

⑤ 黒人女性として差別に抗議する大坂なおみ

【毎日新聞夕刊 2020/8/27 総合】

警官黒人男性銃撃でNBA、MLB地元チームが試合ボイコット、大坂がツアー準決勝を抗議の棄権。】

【毎日新聞夕刊 2020/8/28 社会】

大坂は一転準決勝に出場する。黒人銃撃に抗議、「延期で注目を集めた」】

【毎日新聞夕刊 2020/8/29 社会】

大坂抗議のTシャツ、突き上げるこぶしに黒い腕輪が三つ。それぞれ、BLACK, LIVES, MATTERと白文字で書かれている。】

【毎日新聞朝刊 2020/9/15 一面、スポーツ、社会】

テニスの全米オープン・女子シングルス決勝で、9月12日、ニューヨークで大坂なおみ(22)がビクトリア・アザレンカ(31)にベラルーシに逆転勝ちし、2年ぶり2回目の優勝を果たした。大坂は人種差別に抗議するため、決勝までの試合数にあわせて黒人被害者の名が入ったマスクを7枚用意して入退場時に着用。4大会では社会的なメッセージを発することは原則禁じられているが、特例が設けられた。優勝直後のインタビューで、マスクのこめた思いを問われたが、大坂は

「あなたが受け止めたメッセージはなんでしたか？」と問い返した。

地元のニューヨーク・タイムズは「社会正義のためのラリーをしながら、全米のタイトルを勝ち取った」とたたえた。」

【毎日新聞朝刊 2020/9/15 火論・大治朋子「一人の黒人の女性」】

大坂なおみ選手の人種差別抗議運動に、日本のスポンサー企業が微妙な反応を示しているという。テニスとは別にしてほしい。という思いが一部企業にあるようだ。大坂さんに「企業イメージが」とか「テニスだけやっていた」と思う人は、彼女のアイデンティティや価値観には関心がないといっているに等しい。】

【毎日新聞朝刊 2020/9/21 社説】

大坂選手の人種差別抗議、抗議行動「ブラック・ライブズ・マター」への支持を呼びかけ、自身もデモに参加している。写真（白抜き文字で人名を書いた黒いマスクを付けヘッドフォンを耳に当てて、コートに向かつて歩く）

ある人は「批判を恐れない主張」に心を打たれたという。ツイッターなどで「スポーツに政治を持ち込むな」といった反対意見も出ている。日本ではまだ異端視す

る向きもあるが、大坂選手の姿に共鳴する若者たちが出てきた。「本当のプロの姿だ」】

【毎日新聞夕刊 2020/9/23 一面】

黒人運動（BLM：ブラック・ライブズ・マター）は日本でなぜ批判される。差別構造に理解がない。テニスの大坂なおみ選手が支持を表明。SNSの一部ではBLMへの激しい攻撃も見られ、大坂選手への批判も続く。】

・抗議行動

大坂なおみはテニスプレーヤーの名声を利用して差別に抗議した。テニスコートでの抗議活動は、善悪を超えた一手（将棋用語）だったことだろう。大坂なおみが主張を通したことを、大多数はそれをたたえている。彼女にとって、全米オープン優勝は「おまけ」であったかもしれない。差別に抗議することが、出場する彼女のメイン・テーマだったろう。

BLM運動には、「オレたちの力で、テメーたちの差別意識を変えてやる！」という力強さがある。こぶしを突き上げる凶案がそれを象徴している。対決姿勢を示している。黒人至上主義といふべき一面が感じられる。（テメーら白人がすべて悪いんだ！黄色いヤツ

「私も同罪だ」と叫ぶ声が私には聞こえる。

支持を表明するのは自由だが、テニスの試合に絡めては、ひんしゆくを買ってしまう危険があった。大坂があえて表明したことに、勇氣ある行動だ、などと賞賛している向きもある。マスコミの論調もほとんど好意的であり、持ち上げている。でも、人々の中には批判が起きている。SNSでそんな声が複数発信された。批判的な声が上がっては、日本のスポーツサーなどは引いてしまうだろう。(スポンサーにはスポーツ用品メーカー・ヨネックスやシチズンなど広告に利用する企業が含まれる)

マスコミは、批判の声が上がっているという事実を伝えながらも、「そんな批判には当たらないことだ」として、大坂を擁護する。そして、それらを抑え込もうとしているかのようには、(彼らは理解していないのだ)と逆批判している。私は批判の声が出ていることに注目したいし、意見を加えてみたい。

大坂なおみにとつて、覚悟の決断だったかもしれない。「準決勝を棄権する」と言い出した。これには、私は首をかしげる。プロテニスプレーヤーとしては、職場放棄といつてよいだろう。ボイコットするというのは、わがままなことだ。プロ意識に欠けるふるまい

にもみえてしまう。NBA、MLBの地元チームが試合をボイコットしたことに続いて、彼女も「右へ^{なち}倣い」しようとした。

コーチなど周囲の者は、それに反対したかもしれない。しかし、なおみはきかなかつた。「私も黒人女性の一人として声を上げる」と試合ボイコットを宣言した。しかし、彼女にとつて、それが最優先の正義だとしても、テニスと無関係の主張だろう。

これは迷惑行為であつて、試合で得られるはずの賞金を得られないという自分の不利益だけでなく、試合の相手や、観戦を楽しみにしていたファンたちにばかりさせたことだろう。

主催する大会関係者をあわてさせた。準決勝に進んだ選手が(試合に出ない)とダダをこねては、興行的な損失が大きい。ボイコットの理由が黒人運動だから、怒るわけには行かない。結局、試合の日程を一日順延することで手を打つたことになる。大坂なおみはそれで妥協した。テニスでは怪我などによつて選手が試合を棄権することはたびたびあることなので、試合日程の順延ですんだことは、すべて丸く収まったことになる。

ボイコットの姿勢を見せただけでは不十分だと思

ったようで、さらに、なおみはコートへの入退場時に黒人被害者の名の入ったマスクを着用した。それは抗議の意味だろうけれど、追悼の意味にも受け取れる。客席にいる報道カメラマンが望遠レンズでそれを映していることを、なおみは意識していたことだろう。その映像を見ると、大きめのヘッドフォンを耳につけていた。「ふうんだ、私にはどんな雑音も聞こえないよ」と言っているかのようだ。

テニスコートでは（他のスポーツの場でも一般的に）、「試合に出る選手は社会的自己主張をしてはいけない」というルールがある。こぶしを突き上げる動作など、ご法度だ。オリンピックで金メダルが剥奪された例がある。ドレスコードに関しても厳しい。身に着けるものに何らかの意味を持たせてはいけない。特に4大トーナメントでは、徹底していたはずだ。しかし、なおみのTシャツやマスクに関しては特例として認められたという。本来ならば、完全にルール違反なのだ。大会関係者がこの運動を否定したりすると、「世間から何を言われるかわからない」ところがあったのだろう。大坂のゴリ押し（？）に特例として、やむなく認めたのだろう。無名の選手が同じようなことをやったとしても、こうは注目されないし、認められないだろう。

・黒人女性

ブラック・ライブズ・マターに強く傾倒した大坂なおみ。彼女自身、「私は黒人女性」といつているように、黒人であるために、彼女自身、何度か差別された経験をしてきたと思われる。日本で育ったときの体験が尾を引いているのかもしれない。差別構造に理解がないと指摘されている日本では特にそうだろう。街を歩いていると、周囲から「あつ、ガイジンだ、コクジン女だ」などと、ささやかれる言葉が、いくら声を潜めたとしても、彼女の耳に届いてしまうだろう。差別に関して、彼女自身、切実な思いがあったと理解すべきだろう。日本人には、異質な人に対して感情的に排他的なところをもっている。彼女は（もう日本にいたくない。日本語も覚えたくない）と思っているのかもしれない。

彼女はハーフだ。ハーフだから、好奇心な目で見られることもある。そんな日本にいるよりも、アメリカのほうが、彼女の肌にあっているようだ。肌の色はともかくとして……。

彼女は勝ち進み、全米オープンで二回目の優勝を果たした。アメリカが、彼女自身のホームグラウンドだという思いを強くしたことだろう。常に好奇の目で見ら

れる日本に国籍をおくギリはない。二重国籍を解消するに、迷いはないだろう。(選手はテニスだけしていいばいと言おうような日本のスポンサーなど、ナントかくらえだ)

優勝直後のインタビューで、早速マスクについての質問があった。

「マスクで発信しなかったことは何か」と聞かれると、「あなたが受け止めたメッセージは何でしたか？」と大坂は問い返した。大坂はそんな質問には答えたくなかったわけだろう。質問されて、少々不機嫌になった大坂は、逆質問をしてはぐらかした、と私はとらえる。

そして大坂は「大事なことは議論を始めることです」とつないだが、彼女自身の考えを述べることをしなかった。(私は議論のきっかけになればいい、あとの議論はあなたたちに任せます)ということだ。差別の問題に対して軽々しく言えないから、つい、質問者に対して突き放すような意地の悪い返事をしてしまった、と私は解釈する。多くの人は、相手の強いボールをリターンでみごとに打ち返したかのように、その対応に喝采の声を上げたが……。大坂なおみはそのふてくされた態度で、確かにメッセージを効果的に人々へ発信した。

・警察官射撃事件について

大坂なおみがボイコットを言い出した直近の事件は、ウイスコンシン州で起きた数名の警察官たちによる黒人銃撃事件だろう。警察官が銃を構えているのに、それを無視して車に乗り込もうとした男を背後から射撃した事件だ。その映像を見ると、男は明らかに激怒した様子で、そして車で逃走しようとした。しかも、その車には子どもが2人乗っていたという。警察官たちは(子どもが連れ去られてしまう)という危機感を抱いたことだろう。それを阻止するためには、非常手段に訴える必要があった。ピストルで射撃することだった。近距離から、男にピストル7発を撃ち込んだ。

その前に、二人の女のもめ事を仲裁しようとしてその場にいたという男が、どうして警察の制止をふりきり、車で逃走しようとしたのが大きな疑問なのだが、ニュース記事では詳述されていない。それで私が想像すると、駆けつけた警察に尋問されて男は興奮してきた。(オレは二人の女のもめ事に関係ないんだから、もうこの場にいたくない。子どもを連れて帰るよ)という言い分だったのかもしれない。

男が車に乗り込もうとしたのは、(警察官がオレを銃撃するはずがない)と高をくくっていたかのような

ふるまいだった。銃を恐れない者に銃口を向けても、威嚇の効果はない。

警察官たちは、そんな勝手な態度を見せ付けられ、そうとう凶悪な男として目に映ったわけだろう。興奮したまま車を暴走させる危険を予感させたし、子どもを巻き込む恐れもあった、と考えられる。

「警官たちに人種的偏見があったから、黒人を銃で撃つた」とは、単純に考えられないところだ。確かに、「興奮した黒人男は凶悪だ」という思い込みはあったのだろうか……。

警察官たちは、男が武器などを持っていなかったのだから（後に車の中にナイフが発見されたが……）、車に残りこもうとした男をタックルなどして取り押さえればよかったはずだ。ピストルに頼りすぎたことが、彼らの敗因だろう。

⑥ トランプ氏の集会に来なかった若者たち

【毎日新聞夕刊 2020/5/14 総評】

トランプ氏の集会で、若者たちが「いたずら」した。無料チケットの申し込みをしながら、集会に参加しなかった。同氏陣営は当初100万人以上の申し込みが

あったと誇示したが、集会は空席が目だった。いたずらが陣営の誇大宣伝につながった可能性がある。Kポップファンらがいたずら情報を共有。「集会に登録しただけいけないわ」と冗談を言う動画が拡散した。」

これは、後味の悪い「いたずら」だろう。トランプが、いくらふてぶてしい、尊敬できない大統領だとしても、大人をからかってはいけない。参加すると申し込んだからには、よほどのことがない限り、行くのがルールというものだろう。（自分の過去の例を思い出せば、他人に言えた義理ではけれども）

チケットの申し込みをした若者たちは、それなりに政治に関心を持っていたはずだから、殊勝なことだ。多くの若者から、参加申し込みがあったとは、トランプ陣営として、うれしかったことだろう。おもいがけないことだったかもしれない。しかし、若者たちは気まぐれだ。申し込みをしながら、実際には参加しない人たちがいることを数に入れていたはずだが、これほどの数になるうとは……。

「参加の申し込みをしながら参加しない」ということがひとつのファッションとして、若者たちの間に広まったようだ。チケット制だったわけだが、無料なので、

参加しなくても、損はない。申し込みにしても、手間はかからない。行く義務も必要性もないから、少数の若者が気軽に「私、行けないわ」と言い出したことが、多くの人たちに拡散したわけだ。

「あら、私もいけないわ。Me Too（私もよ）」
「トランプが何を言うか、興味があつたけれど、それを聞くに行くのは、優先順位としては低いわね。どうせ彼のことだから、自慢たらたらなんですよ」

つまり、一部の若者が「トランプをからかってやろうぜ！」とあおった可能性もある。また、100万人以上の申し込みがあつた」と宣伝されて、そんなに多く集まる集会には、コロナウイルスが怖いから、参加に尻込みしたことも一因かもしれないが、それはもとよりわかっていたことだ。最初から行くつもりがないのに申し込んだわけだろう。それによって、行きたくても選に漏れた人がいただろうから、そんな人たちに對しても、迷惑行為になる。

大きな会場に、まばらな聴衆しかいないことを知って、トランプ氏は慥然としたことだろう。姿の見えない若者たちに向かつて、「あのヤロども、オレをコケにしおって……」金カネ（選挙資金の寄付）にも票にもならんやつらだな」と、心の中で吐き捨てる。

⑦ 2児を車に置いて夜遊びしていた母親

【毎日新聞朝刊 2020/9/4 社会】

9月3日正午過ぎ（午後0時40分ごろ）、香川県高松市の路上に駐車していた乗用車の後部座席で竹内真友理ちゃん（6）と妹の友理恵ちゃん（3）が意識を失った状態で見つかった。熱中症と見られる。母親は車内に2人を残し、しばらく車から離れていたという。気象台によると、同日の高松市の正午ごろの気温は36.0度。】

【毎日新聞朝刊 2020/9/7 社会】

姉妹を車に置き去り死亡で、母親は飲酒を認める。1〜2軒目は1人で店を出た。3軒目、明け方まで飲酒し、車に戻るまで知人男性と一緒にいたとみられる。】

【読売新聞朝刊 2020/9/10 社会】

高松2児死亡、4人暮らしだった。家族で自宅の庭のプールで遊び、車で出かけるなど、近所の人から幸せな家族に映っていた。9月3日午前3時ごろ、竹内内容疑者は3軒目となるバーに入った。午前5時半頃に店を出て昼頃まで男性宅にいた。夫は県警に「妻は州2

「3階実家に帰っていた」と説明。容疑者は、未明に繁華街を1人で飲み歩く姿が頻繁に目撃されていた。」

【読売新聞朝刊 2020/9/25 社会】

高松2児死亡、車に放置、飲酒は3夜連続か。9月1日から2日にかけても繁華街の飲食店を訪れていた。姉妹を車内に放置し、飲酒していたことを認めたという。3日の午後0時22分まで市内の駐車場に止めた乗用車に姉妹を放置し、熱中症で死亡させたとされる。2日の夜、竹内容疑者は近くの繁華街で2軒の飲食店をはしごし、3軒目で知人の男性と合流、明け方まで飲食後、男性宅で過ごしたことがわかっている。当初は自宅や実家で姉妹を寝かしつけていたが、飲み歩くことが増え、「家族に注意され、預けられなくなった」。夫には「実家に行く」と告げ、実家には「自宅に戻る」とウソをついたという。」

事件の発覚時、母親はかたくなに本当のことを言わなかったが、警察に厳しく追及され、約3週間後になつてようやく事実（事件の核心）を話すようになったようだ。夫や家族に知られたくない行動をしていたから、言えなかったのだ。

この容疑者は母親として最悪のことでしてしまったわけだ。最低の母親ということになる。夫を裏切ったし、実家の家族にもうそをついていた。金もあり時間的余裕もある容疑者は、夜な夜な繁華街（夜の街）で飲み歩いていたのだから、どうしようもない。彼女は、飲み歩くだけの社交性もあったようだし、若いし、おそらく美人だろう。

夫は会社を経営し、仕事熱心で、深夜まで働くような人だったと伝えられる。時間があれば子どもをかわいがっていたが、若い妻に対してはどうだったか。かなり自由にさせていたことになる。夜遊びが好きなことはわかっていたようだが……。妻に甘い夫だったと推察される。

容疑者は夜に出かけるために、「実家へ行って泊まる」と夫に言い訳し、「子どもたちも一緒に行く」と言って信用させていた。

実家の家族（おそらく、容疑者の父と母）は、夜に飲み歩くために姉妹を実家に預けていることを知るようになり、その行動を諫めはしても、なかなか改めない。若い女性が一人で深夜に飲み歩けば、男が放つて置くはずがないから、心配なことだろう。それを止めさせるために、夜遊びに加担するようなことを、つま

り姉妹を泊まらせることを断るようになった。しかし、容疑者は車の中に姉妹を寝かせることを考え付いた。車はドイツの高級車だから、子ども二人なら、後席で快適に眠れる。

実家の家族は、容疑者が彼らの孫たちを車の中に寝かしつけているとは、考えもしなかったことだろう。事件後、車に寝かせるぐらいなら、この家に泊めさせればよかった、と後悔していることだろう。

9月2日の夜、車に2人を寝かしつけてから、彼女は飲みに出た。夜の気温は暑くも寒くもなかった。蒸し暑さも感じなかったから、エアコンをかけず、窓を閉めたという。次の日の朝に、涼しいうちに車に戻り、車を移動すればいい。炎天下に車を置くつもりはまったくなかったと思われるが……。

飲み屋をはしごした。2軒目を出たのが午前3時だったというから、この時点でかなり遅い。それでも物足りなかった彼女は3軒目で知人男性と会い、明け方まで飲んでいた。店を出てから、男性宅に行ったのは、お決まりのコースだったのかもしれないが、時間的にはアウトだろう。

男女のことが終われば、車に戻って姉妹と一緒に寝

ていればよかったものを(運転するのは無理だろうが)、彼女は正午近くまで男と眠っていた。車が炎天下にさらされていることに、まったく気づかなかった。

9月初旬の太陽光は、真夏を過ぎたとはいえ、まだそうとうに強烈だ。朝方の低い角度で照り付ける光でも、かなりの熱さを感じるものだ。日が射すところに車を置くならば、すぐに内部の温度は上昇する。窓を閉め切っていたというから、1時間もすれば、サウナ状態だろう。車を日陰に置くような配慮をしてほしかった。男の家で正午近くまで眠ってしまったのは、彼女にとって計算外のことだった、と私は思いたい。

高級車の場合、ドアのロックを集中管理するから、キーを持っていなければ、ドアを開けるのは難しいし、窓を開けることさえできない。監禁状態だ。非常手段としては、窓ガラスをカナヅチで叩き割るしかないだろう。子どもがドアを勝手に開けることはできない仕組みにもなっているものだ。子どもが泣き叫んでも、声が外には響かなかったのかもしれない。人通りの少ない路上だったのだろう。通行人も気づかなかったわけだ。

毎晩のように飲みに行っていたというから、この容疑者はアルコール依存症だった可能性がある。アルコ

ールのせいにするのも、一つの考え方だろう。姉妹を熱中症にさせたのは、酒の上での失敗の一つになるだろう。これを機に、酒を止めるしかない。

夫のほうに、妻への対応に配慮が足りなかったなど反省すべき点があるかもしれない。それで妻を許す許さないはともかくとして、けじめとして離婚することだろう。ほつぺたを一発張りとはしてから離婚を宣言することがセレモニーだろう。

⑧ PCR検査で韓国の申し出を黙殺した日本政府

【朝日新聞朝刊 2020/4/26 総合3】

韓国がPCR検査キットで日本を支援する提案。要請が前提。

【朝日新聞朝刊 2020/4/28 総合4】

韓国がPCR検査支援を検討していることについて、菅氏「具体的やり取りない」、厚労相「性能評価が必
要に」】

【朝日新聞朝刊 2020/5/1 国際】

PCR検査、韓国は過去を教訓に大量準備した。】

【朝日新聞朝刊 2020/5/8 総合3】

日本政府の対応に、海外が疑問視する。日本ではPC

R検査が絶対的に少ない。】

【読売新聞朝刊 2020/5/9 一面】

コロナ受診で新目安が示された。息苦しさがあれば「すぐ相談」すること。「37.5度以上の熱が4日以上続く」の記述を削除した。】

・ PCR検査

新型コロナウイルスの感染は、PCR検査での陽性を確認する必要がある。医者がどんなに優れた名医であつても、患者を診るだけではCOVID-19（新型コロナウイルス感染症）と断定することはできない。風邪かもしれないし、インフルエンザかもしれない。

PCR検査して陽性ならば、感染したとわかるから、あとは医者が患者を診察して、軽症か重症かを判断して治療法を考えればよい。隔離先を考えることも必要だが、それは保健所の役割かもしれない。

疑いのある人を検査しなければ、感染拡大を招く恐れがある。患者が重症化してしまう危険性があるし、症状が出にくい感染者がウイルスを無意識にばらまいてしまうかもしれない。

・ 韓国の事情

感染症対策では、韓国は先進国といつていい。韓国

は今回のコロナウイルス感染症に対して比較的早めに対応し、抑え込みにも成功したといっている国の一つだろう。PCR検査能力が高かった。過去にコロナウイルス感染症の一種SARSの経験があったから、備えができていたのだ。PCR検査の必要性を十分に認識していた。韓国は過去の教訓をよく踏まえている。

日本は、そのSARSのとき、対岸の火事のごとく眺めていて、ろくな対応はしなかったわけだろう。今回の新型コロナウイルス感染症の多発で、完全に遅れをとった。

・日本の逼迫ひびやく

新型コロナウイルスの感染者が国内で初めて確認されたのは今年1月。横浜港に寄航したクルーズ船の乗客乗員の多数で感染が確認され、港の外に足止めされ、大騒ぎとなったのは2月だった。そして国内での感染者数が上昇した3月から6月までの第一波で、PCR検査の実施に能力不足が明らかになった。検査の数を限定する状況が続いた。

初期の時期には、窓口が保健所だけだったし、相談・受診の目安が「37.5度以上の熱が4日以上続く」という、とんでもない条件が付けられた。その4日間は長すぎる空白期間だった。それを決めた対策会

議のメンバーたちの学識を疑いたい。

しかし保健所は、少数の検査しか処理できないものだから、それを口実にして検査の要請を相次いで断っていたわけだろう。保健所の中には、検査を要望する人が濃厚接触者と認めながらも、PCR検査を断ったり延期したりしたケースがあったという。保健所の対応が悪いというのではなく、需要の増大に処理能力が追いつかなかつた体制に原因がある。

政府があわててその能力の拡充を進めたが、掛け声だけで、その目標に達しなかったのが実情だろう。PCR検査の機器や拠点の整備、それを操作する人材の確保、検体採取から検査結果の報告までの運営・管理体制の構築を考えると、検査規模の早急な拡大は難しい。総合的な対応が求められるから、どうしても時間がかかる。

現に、9月になつても必要十分な検査がされていない現状を、NHKのクローズアップ現代プラスが報じていた。それは「なおも逼迫するPCR検査」と題していた。ただし、ようやく近頃（10月）は、一般病院でも、無症状の人のPCR検査に対応するところがあったり、簡易検査や抗原検査で判定できるようになったりしているから、逼迫度は緩和されつつある。そ

の検査費用は3万円ほど自己負担になるというから、まだハードルが高い。もっと安ければ受けに行きたいという人が、多くいるだろう。風邪の症状の一つが出れば、新型コロナウイルスの検査を受けなくなるご時世だろう。

・ 4月に韓国からPCR検査支援の申し出

4月といえば、日本でPCR検査が絶対的に不足しており、PCR検査処理能力の増強が叫ばれていたときだ。このとき、韓国からPCR検査支援の申し出があったことは「渡りに船」のありがたい話であったはずだ。コロナ禍の中で、韓国が親切にも、手を差し伸べてくれた。

その申し出は「韓国から言い出さないが、日本から要請があれば受けますよ」という前提をつけているが、実質的に韓国からの「申し出」に他ならない。それは「日本から何も言い出さなければ、この話はなかったことにしますよ」という意味をもつ。つまり、日本は韓国に頭を下げてお願いする形をとりなさい、といっている。

しかし、日本政府は、その形をとれなかった。結局、申し出を受けなかったし、そもそもPCR検査に余力のある韓国に、支援を要請するような発想がなかった

ことに、度量が狭すぎる。変にプライドの高い日本政府は、それができない。それが安倍政権のプライドだったのかもしれない。自国で何とかできるという、安倍首相らしい「思い上がり」だった。

どちらの国が申し出をするかしないかは、それは外交上の形式だけのことだろう。日本政府は自国の人々をコロナウイルスから守る手段の一つを放棄したわけだ。

韓国に申し出ることによって、PCR検査の拡大がはかられ、日本の保健所は少しはオーバーワークから救われたかも知れなかったから、国民を軽視した政府の判断になる。

政府がそれを断る口実として理由に挙げたのが「性能評価が必要」ということだった。厚労省がそれをいうなら、配下の研究所でさっさとやればよいことだし、PCR検査など世界共通の技術であり、優劣などの差があるとは考えにくい。その評価が今さら必要とは思えない。日本で行なっていることの違いを検証すればいいことだ。検査キットメーカーが異なるなど微細な差があるかもしれない。検体の採取方法などの手順を含めて調べればわかることだ。そんな情報は、もともと以前に、感染症専門の研究機関が抑えていなければお

かしい。だいたい、その方面で実績があり、その先進国である韓国での検査方法を疑っては失礼なことだろう。

この感染症に対応するには、国際協力が欠かせないところだ。それなのに、日本政府は「意地でも韓国の世話にはならない」というプライドをみせた。不合理なことだ。日本のこの態度は、海外の目にも奇異に映ったことが報道されている。

政府お抱えの対策会議のメンバーたちは、だれ一人助言する声を上げなかったのだろうか。

単に、PCR検査で支援を受けるメリットだけでなく、これによって韓国に「恩にきる」ことになり、日本からも何らかの「お礼」をすることによって、じれた友好関係が修復されるきっかけになるかもしれない。互いに好ましい関係が再構築できるチャンスだった。

日本政府には「人の好意を無にしてはいけない」という格言を思い出してほしいところだ。

⑨ 父殺しの少年たち

【毎日新聞朝刊 2019/2/14 神奈川】

横浜市金沢区の自宅マンションで昨年1月、父親を包丁で刺して殺害したとして殺人罪に問われた少年（19）に、検察は懲役5年以上10年以下の不定期形を求刑した。一方で弁護士側は父親の長年にわたる虐待やDVから引き起こされた事件で、母親を守ろうと犯行に及んだとして少年院での更正が相当と訴えた。【

毎日新聞夕刊 2020/5/26 社会】

横浜市神奈川区の自宅マンションで父と二人暮らしの自称私立高校2年の少年（16）を傷害容疑で逮捕。「父の頭を刺した」

浴槽内で父の遺体を発見。「父から暴力を受けていた」少年は相模原市に住んでいた2019年11月と2020年2月に各1回、相模原署に「父から暴力を振るわれていた」などと相談していた。父親は「暴力は振るっていない」と虐待を否定したが、県警は虐待の恐れがあるとして児相が2回少年を一時保護した。【

【読売新聞朝刊 2020/9/19 くらし・人生相談】

（中学生の兄が小学中学年の弟と父のことで相談）

弟は気が弱く、意思も弱く、両親の言いなりになることが多いです。父は弟に中学受験をさせて、偏差値の高い私立の学校へ進ませようとしています。弟がまだ勉強に身が入らないことを父はとても怒り、日を追うごとに怒りがエスカレートしてきて、毎日のように弟をどなっています。弟は不登校になってしまいました。(略) このままでは何らかの暴力に発展しかねないのではないかと心配です。】

【読売新聞朝刊 2020/9/15 社会

青森つがる市の高校生の少年(16)が、父親を刺殺した容疑で逮捕された。】

DV(ドメスティックバイオレンス)4件の記事を掲げたが、先の2件について、この概説の後に個別に詳説したい。

いずれも、父親の暴力暴言を受けて、息子が反抗したケースだ。周囲の関係者が父親の暴力をとめられなかったことが、一つの社会的な問題だろう。ただし現在は、公的に通報するケースが増えて、対応してもらえることが増えている。

被害の少年が警察に相談しても、多くは解決に至っていないことがもどかしい。警察は話を聞くだけで何

らかの事件が起きるまで(血を見るまで)動かないのが、決まりのようだ。少年が相談したとしても、彼らは大人の立場で、被害者の少年の方に非があると指摘したりするのかもしれない。担当者「そりゃー、キミに原因があることだよ」

父親は、だいたい一家の主あるじとして君臨する。威張りたがる。男親はたいいて腕力もあるし、財力(経済力)もある。社会的地位もある。妻や子に対して、落ち度があれば、叱責する。

「オレがリーダーだ。この家の長だ。xx家の代表だ。これからは、家でのことは、このオレがすべてを取り仕切る。いいな」などと宣言する。そんな宣言しなくても、暗黙の了解をとっているとみなす。

「オレには女こどもを殴る権利があるんだ」と思い込む。

オヤジは理不尽なことでも、自分の意見を通そうとする。家族が正論を反抗的に言い返せば、

「誰のおかげでテメーたちは飯を食っているのだ」と恫喝する。

「オレの言うことが聞けないか? それなら、出て行け!」と脅す。

意のままにならなかつたり従わなかつたりすると、

いらだちを募らせ、怒る。怒鳴りまくる。

「コノヤロー、何度言わせるんだ？」 「一度いわれたら、さっさとやらんか！」

「テメー、痛い目にあわなければ、わからんのか」 おもむろに近づき、ほったを張り飛ばす……パシン。頭をグーで殴る……ゴツン。髪の毛をつかんで振り回し、投げつける……ドシン。倒れ込めば、腹にけりを入れる……ドス。

だんだんエスカレートするのが「日本のオヤジ」の習性だ。

オヤジの権威を保つために、やっきとなる。殴る権利を行使する。オヤジの強さを見せ付ける。

一発や二発では腹の虫が収まらないときは、ビシ・バシ・ドン・ゴン・バン・ドス……もう疲れはてるまで一方的に殴りまくる。手加減しているようには見えな。激高すると本気で蹴りまくるし、時には柔道技を繰り出してくる。締め技を使い、気絶させたりする。相撲技で突きとばす……。

「地震、カミナリ、火事、オヤジ」の本領をいかになく発揮する。

オヤジは自分の行為をしつけと称して正当化するこ

実際にそんなオヤジがいたという話を聞くし、普段

おとなしい父が、酒を飲んで暴れたという話もよく聞くことだ。DVの傾向のあるオヤジは少なくない、と私はみる。隣のオヤジが暴れても、ありふれたことだから、無関心を装い、多くの人は通報しないだろう。近隣の人が通報したとしても、警察の対応は期待できなかった。「ナニ？ 隣がうるさすぎる？ なあに、そのうち収まるよ」「家庭内のことに警察は介入しないよ」と言われてしまうことが多かったらしい。

・横浜市金沢区の場合

2018年1月、この少年は普段から父に暴力を振るわれていた。恨みが募っていたことは確かだろう。長年の恨みを晴らすために父を刺殺するという動機は十分あるだろう。しかし事件は、このオヤジが母にも暴行していたときに起きた。「母親を守ろうと犯行に及んだ」という理由が挙げられている。

体の大きい父の暴行を止めるには、刺殺するしか少年には思いうかばなかった、と思われる。私がそんな状況を再現する一つシナリオを考えると――

「やめろ、オヤジ！ 母さんを殴るのはやめろ！」

少年が父にすがりつく。

「ウルセー、テメーにやめろと言われて、オレがやめ

るすじあいはない！ テメーは引っ込んでろ！」

少年を突き飛ばす。へやめないなら、オレが何としてでもとめなければ。強いオヤジに対抗するためには……そうだ、ナイフがある」

「オヤジ、死ねえ！」 時空を超えての少年の叫び声が響く。

・横浜市神奈川区の場合

2020年5月に起きた事件。

この父親は日常的に少年に暴行を働いていたのだろう。少年が自分の意のままにならないことに腹を立てては、怒鳴りまくり、殴る蹴るの暴行を働く人物だったと推測される。

この一家には、母親の姿が見えない。母親は、見限って早々に出て行ったのかもしれない。どうしようもない夫だったから、と私は推測してしまう。短期間に引越しを繰り返していたのも一つの謎だ。

少年が相模原署に相談したとき、警察は暴行事件として取り扱ったとしたら、この事件を防げたかもしれない、と私は思ったりする。少年の顔や体を見れば、傷や痣あざの一つや二つ、すぐに見つけられたと思われる。警察は、少年が暴行されたとしても、その容疑者が父親ならば、家庭内のトラブルとして、無視するものら

しい。被害者を一時的に保護しただけでは、不十分だろう。加害者に対して、おそらく、口頭で注意したぐらいで済ませたのだろう。

父親が「暴力は振るっていない」と虐待を否定していたことに、ひとつ注目したい。この男は自分が息子を暴行していることに罪悪感もなく、むしろ自分の行為を正当化していた。暴力を振るっているという自覚がないのだから、どうしようもない。

暴行事件をほったらかしにしているから、殺人事件に発展した、とも言えるのだ。警官は、加害者に対して「あなたのしたことは、しつけども何でもない。暴行ですよ」ときつく言わなければならなかった。

一時的に保護した後、少年を、ぜんぜん反省もしていない父親の元に返せば、また暴行が繰り返されるに決まっている。少年を成人になるまで長期的に保護施設に置く方がよかった。2回も一時保護したということとは、3回目もありうると考えなければならぬ。3回目は逮捕になってしまったわけだ。

成長期にある少年は、しばらくすれば、体格的にも子供でなくなる。気の弱かった少年にしても、もう一方的に怒鳴られたり、殴られたりするわけにはいかない。父親が理不尽ことで叱責すれば、言い返したく

もなる。

父親には、子供を養育する義務があり、子供をしつける権利を持つものかもしれない。しかし、父親の権威や権力を、子供は認めないようになる。それは、子供にとって不当な暴力にしかみえなくなる。言い返しても、説得しようとしてもむだだという絶望感が頭によぎる。このままでは殺されてしまう恐怖と、自分のおかれた状況に関する悲しみがこみ上げる。暴力の連続を断つためには――

「テメーが先に死ぬ番だ。オヤジ、死ねえ！」

これで少年は父親から、解放された。少年にとって自衛的なチョイスだった。形だけの反省は必要だろうけど、心からの反省は不要だろう。今後、司法の場で、殺人罪として罪に問われることになるが、未成年だし、情状酌量されて比較的軽い刑ですむだろう。

しかし、父親の呪縛からは逃れられない。どうしようもない父親の血が自分の中に流れていることに、一生苦しむのかもしれない。

⑩ ALS 嘱託殺人に問われた医師たち

【読売新聞朝刊 2020/7/24 一面、社会】

ALS 患者を嘱託殺人、薬物を投与した疑惑の 2 医師を逮捕。林優里さん（51）は、京都市の自宅で 24 時間体制で介護を受けていた。昨年 11 月 30 日、介護ヘルパーは 2 人が帰った直後、意識のない林さんを発見。林さんはツイッターやブログで安楽死を望む書き込みを繰り返し返していた。林さん「指一本動かせぬ自分がみじめ」

【毎日新聞朝刊 2020/7/25 社会】

ALS 嘱託殺人、胃ろうに睡眠薬を投与したか。死因は急性薬物中毒だった。薬物はバルビゾール酸系の睡眠薬と判明。】

【読売新聞朝刊 2020/7/27 社会】

ALS 嘱託殺人、（彼女は）海外の自殺ほう助団体へ依頼を具体的に考え、130 万円はこの団体が受け取る費用とほぼ同額だったという。】

【毎日新聞夕刊 2020/7/27 社会】

ALS 嘱託殺人の医師が口座番号を伝え、女性に入金を促す。19 年 5 月のブログ「リスクを背負うのになったくのボランティアではやってられません」などと

書き込んでいた。】

【読売新聞朝刊 2020/7/28 社会

ALS女性は、主治医に容疑者への紹介状を書くことを求めたが、主治医は、(容疑者が)所属する医療機関などがわからず、書かなかった。】

【毎日新聞夕刊 2020/7/31 近事片々

「ドクターキリコになりたい」とALS嘱託殺人の容疑者。戦場医療を体験したキリコの苦悩が彼にあるのか。】

【読売新聞朝刊 2020/8/8 社会

ALS嘱託殺人、容疑医師は、別患者とSNSで、安楽死で情報交換していた。】

・自殺願望

林優里さん(51)は死にたかった。それは一時的な思いつきではなく、かなり長い間思い描いてきた願望だった。死にたかったけれど、それまでなかなか死ねなかつた。〈できれば安らかに死を迎えたかった〉ことがわかる。日本では安楽死することはできなかつたから、海外に求めたが、それも実現できなかつた。

この世では、生きる権利があっても、死ぬ権利は原則認められない。法的な規制がかかっているから、人

は安らかに死ねないものなのだ。他国ではともかく、日本では、安楽に死ねないことになっている。死ぬという選択は、難しい。彼女にとっては肉体的にも難しくなっていた。自分で死ぬことはできなくなっていた。どうしても他人の手に頼らざるを得ない。他人の介助、あるいはほう助を受ける必要があった。

なぜ死にたかったかは、本人だけが知ることであり、それには他人がとやかく言えない。それは日本で毎年、数万人の自殺者が出ているうちの一人であり、人それぞれ事情があり、理由も異なっていると考えるべきだろう。大まかに分ければ、彼女の場合、自己都合の範疇に入る。

他人がその理由を考えるのは憶測になる。理由を「ALS「筋萎縮性側索硬化症」だから……」と単純に考えてはいけないだろう。「ALSという病気のためだろう」と推測するのは、憶測のそしりをまぬかれないことかもしれない。自己都合による自殺などに正当な理由などないだろう。正当であろうと、なかろうと、本人は死にたかった。

あえて憶測すると、24時間体制で介護を受けていたのは、本人にとって「余計なお世話」だったのでらう。24時間付き切り介護の介護、すべて他人にやって

もらい、生かされている。人間の尊厳、プライドが傷つくことだ。ただし、医療の助けにより、治療を受ける、あるいは介護の手をかりて世話をしてもらうことは、人権として正当なことであり、遠慮は要らない。

ALS患者に対する社会的な介護体制ができていたとえ寝たきりであつても、生きられる。生きる権利が保障されている。意思表示する手段は、現代では技術や器具が発達しているから、声を出せなくても、字がかけなくても、わずかな動きを読み取ることが可能になっている。しかし、治療と回復においては、現代の最新医療でも、難しさがある。絶望感を持つてしまうことがあるだろう。

本人は明確に「死にたい」という意志表示をしていた。しかし、日本社会は、死にたいといつても、死なせてくれない。そして彼女が選択したのは「不法な方法」だった。

・主治医

記事の中には、女性が主治医を代えたかったことが明らかになっている。医師の容疑者に主治医になってもらいたかったのだ。容疑者が主治医なら、他人に怪しまれずに「自然死」にしてもらえるだろうという目論見だったのだろう。女性は、紹介状を書いてもら

えなかったわけで、主治医を代えることもできなかった。おそらく、その主治医は患者の気持ちが変わらないふりをしていただろう。紹介状を書かなかった理由は、言い訳がましい。

「ん？ 死にたい？ 今でなくてもいいだろうよ、そのうち、だれでも死ぬから。あなたは病人だから、病人らしくしてればいいの」などと心の中で思っていたりして……。

医者は患者から「死にたい」と告白されることは珍しくないのだろう。

彼女には、ますます選択範囲が狭まった。24時間介護する人間がはり付いている自宅に、もはや「彼女」に来てもらうしかなかった。

・二人の来訪者

彼女は、情報機器の操作はかなり困難でありながらも、自分でネットを介して探し出し、彼らと連絡をとった。

彼らは彼女の要望にこたえてくれる、数少ない人たちだ。彼らは、日本には珍しい使命感を持った人たちだろう。自殺願望者に手を貸すのは、なかなかできない。慈悲の精神がなければできないことだろう。そのためには法を犯すことを彼らは認識していた。ドクタ

「キリコのように戦場で苦悩した体験はなくとも、彼らの本職は医者だから、患者たちの苦悩をそれなりに理解していた、と思われる。

彼女の元に来訪した彼らは、胃ろうの管に薬剤を投入した。致死量になるだけの量を……。

2人が去ったあと、介護職員が見ると、様態が急変した。毒を盛ったことがすぐに疑われてしまった。投与から効能までに時間差のある薬物を使えなかったのだろうか。おそまつ過ぎるやり方だ。これでは「殺し屋」を続けられるはずがない。

無報酬なら純粋な人助けになるところかもしれないが、金をもらっては、営利目的になってしまう。いわゆる「殺し屋」であり、最低の職業の一つとされるものだろう。

二人の医師が金を受け取ったことについて、多くの人は、「コノヤローども、薬を投与するだけで130万円も取りやがって、二人で山分けか？ いい商売だね」「患者の弱みに付け込んで、ぼったくったな」と怒るだろう。やっかみの気持ちも入ってしまう。

彼女は自分の有り金をはたいて依頼したものだだろう。でも彼女にとって、お金を出し惜しむ必要はなかったのだらうし、相応の支払いだったのだらう。いわば、

納得の行く契約をしたのだ。ただし、前払いして、本当に実行してくれるのか、疑ってはいた。彼らは、その点では誠実だった。

「ボランティアではやっていられない」とする彼らの言い分。不法なことをするのだから、リスクが伴う。容疑者たちがカネを要求したことに、私は半分納得している。言い換えれば、「もしもリスクが伴わないなら、ボランティアでやってもいい」ということだ。「リスクがあるのに、ボランティアでやったら、人がよすぎるよ」と自分を責めてしまうことになりそうだ。金をもらうのは、一つの割り切り方だろう。

・司法

容疑者たちが下手なことをしたのだから、結局、司法が張り切って捜査する事件になった。毒殺事件は捜査が難しいものだが、これはわかりやすい。ただし、事件から逮捕まで半年以上かかった。彼らがやったことは、実質的に〈自殺のほう助〉のはずだが、司法が問うている罪は〈嘱託殺人〉だから、意図的に重い罪を課そうとしているわけだ。「殺人を請け負った」とみなされている。その場合、殺人を依頼した人物が一番の悪者とされるべきだが、依頼人を罪に問わないのだろうか。

・依頼人

彼女は、長い間の願望がかなえられ、ようやく死ぬことができたのだから、満足したことだろう。殺し屋を雇ったことに後悔はないはずだ。これで、ベッドに横たわったままの不自由な生活を断ち切ることができた。とりあえず周囲の人たちに感謝したかったことだろう。

彼女は、殺し屋たちのその後を知る由もないのだが、もし知ることができたならば、つまり靈魂よじの存在を仮定したならば、彼らにこう言いそうだ——「ありがとう。でも、私のために罪に問われることになったとは……。迷惑をかけてしまい、ごめんなさい」